

古代ギリシア文化研究所 2024 年度総会および研究集会【報告要旨】

報告 1) 福本薫「人を襲うライオン」図像の源泉について

デンマーク国立博物館所蔵のカントロス (inv. 727) は、アッティカ後期幾何学様式の作例群の中でも議論が集中してきたものの一つである。片面中央部では、向かい合う二頭のライオンが、一人の戦士を食いちぎろうとしている。本作の「人を襲うライオン」については、英雄的な死の暗喩とする説、名誉ある死の対極とする意見などが出されている。

本発表では、先行研究で等閑視されてきたこの「人を襲うライオン」図像の源泉を考察したい。オリエントでは、王がライオンを圧倒し、その強さを示すモチーフの伝統がある一方、人がライオンに襲われる例も存在する。本作と同じ墓から出土した金製の帯にも後者のモチーフが見られる。本発表では、フェニキア美術における「人を襲うライオン」を概観し、それがクレタやアッティカにどのように伝播したのかを考察した上で、この図像の源泉とギリシアでの定着過程に光を当てたい。

報告 2) 竹尾美里「キクラデス諸島の聖域研究 昨今の研究動向：古典期アテナイのデロス島支配に関する研究 再検討」

前 5 世紀から前 4 世紀にかけてのデロス島におけるアテナイの関与は、数多くの碑文によって詳細に記録されており、デロス同盟の金庫がアテナイに移管された前 454 年以降も、アテナイはデロス島の聖域管理に深く関与し続けた。アテナイによる管理は、デロス同盟解体後の中断期間を経他ものの再度の介入を果たし、前 314 年まで継続させた。

これらの碑文記録の中で、前 377/6 年から 375/4 年のデロスの聖財管理記録である ID 98 は、デロス人によるアテナイ人への暴力事件について言及した興味深い史料として知られている。この事件の詳細は不明だが、当時のデロス島住民がアテナイに対して強い敵対心を抱いていたことを示すものである。ID 98 と関連づけられる ID 88 や、アテナイとデロス間のプロクセノス碑文は、デロス島住民のアテナイに対する反発が長期間にわたって続いたことを裏付けている。これらの史料は、デロス島とアテナイの関係が対立と協調を繰り返してきたことを示唆している。

本報告ではこれらの史料を検討する足掛かりとして、昨今の研究動向を概観する。

報告3) 内川勇海「古代アテナイの訴訟手続の分類について」

近年、古代アテナイにおける公と私をめぐる議論が盛んになる中で、アテナイ訴訟手続を私的訴訟 (*dikai idiai*) と公的訴訟 (*dikai demosiai*) に大別する通説も再考を迫られている。

とりわけそれぞれの分類の代表的な手続である私訴 (*dike*) / 公訴 (*graphe*) については、「私」訴、「公」訴 (あるいは ‘private’ prosecution と ‘public prosecution’ など) と翻訳し、前者は私人同士の私的な紛争の解決、後者は公共 (ポリス) の利害に関わる問題への対処や犯罪の処罰を目指したものであるとする理解は、様々な面から批判されている。

本報告では近年の古代アテナイ訴訟制度に関する研究を参照しつつ、訴訟手続をどのように分類・翻訳して理解すべきかを検討する。特に私訴 / 公訴などの訳語と日本の法律との関係性や、現代の法律用語をアテナイの法律用語の翻訳に用いることの妥当性などにも着目することで、訳語 / 原語間のニュアンスの差異や、訳語から想起される訴訟手続の様態と実態との齟齬を明らかにすることを目指す。